

長野市緊急時における子ども支援ネットワーク 学習会 緊急時の子ども支援の連携について考える 開催報告

開催日時／令和8年7月26日(日) 10:00～12:00

開催場所／長野市若里市民文化ホール 会議室②・③

活動発表者：山崎 博之氏 社会福祉法人長野県社会福祉協議会(長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会事務局)
丸山 志野氏 社会福祉法人長野市社会事業協会 児童発達支援センターにじいろキッズらいふ
小笠原 憲子 長野市緊急時における子ども支援ネットワーク

活動発表① 災害時にも福祉の力を 災害福祉支援・長野県 DWAT の取り組み

今年7月、「長野県災福センター」(県域の災害ボランティア・福祉支援センター)開設

DWAT(災害派遣福祉チーム)、災害 VC(ボランティアセンター)、行政・社協・NPO 等の三者連携で、災害にも強い地域づくりを目指す。

長野県災福ネット(長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会)の概要

28 団体加盟。災害時の地域包括ケアを支えるため、保健・医療・福祉の連携促進と DWAT(災害派遣福祉チーム)の養成。平時からさまざまな取り組みをしている。DWAT は現在、各団体から約240名のチーム員を登録(目標300名)。

平時の取り組み

- ・ 「人にやさしい避難所」設置・運営訓練
- ・ 日本防災士会長野県支部と連携し、出前の訓練研修を昨年度 18 回実施

医療的ケア児支援と地域のつながりづくり事業

電車(電気自動車・PHV ハイブリッド)と人工呼吸器を接続し、災害時に電源獲得の社会資源になる啓発活動を行っている。福祉避難所の清泉大学でも訓練を実施。

活動発表②災害という「非日常」を安心の場に変える実践報告と提言

～災害支援から学ぶ、こどもの居場所に必要な視点と環境調整～

災害時に想定される子どもたちの「困り感」

- ・ 咀嚼嚥下の力、食べ物へのこだわり・偏食、食器へのこだわりなどで食べられなくなる
- ・ 見通しが立たないことによる不安
- ・ 音、におい、まぶしさなどで避難所にいられない

にじいろキッズらいふの実践:非日常を日常に溶け込ませるアプローチ

2ヶ月に1回の避難訓練に加え、食育活動の中に災害食体験を組み込む。はじめてのことが苦手な子どもたちだからこそ、平時の安心できる環境の中で、さまざまな経験を積み重ねる

例)アルファ米でおにぎり・紙コップで飲んでみる・紙皿、使い捨てスプーンを使う・缶の飲み物プルトップ開けるなど、非日常を組み込んで楽しみながら繰り返し体験

福祉を利用する人だけが、特別な支援が必要なわけではない

文科省の調査では通常クラスの3分の1以上の子どもに支援が必要。全員が対象のユニバーサルな避難所設計が必要。

災害時は人のマンパワーに頼る支援には限界がある。人手がないときでも安心安全に過ごせるように、被災者自身が知りたい情報を、知りたい時 知りたいだけ知れる安心が大事。いつどこで何をすればよいか視覚的にわかる、すべてのひとにわかりやすい「ユニバーサルデザイン」を取り入れる。

TEACCH の「4つの構造化」とユニバーサルデザインの視点

TEACCH: 自閉症支援のために開発されたが、「全ての人に有効」として一般化が進んでいる

①物理的構造化(場所の区分け) ②視覚的構造化(カード・写真)

③時間の構造化(タイムタイマー) ④活動の構造化(手順書)

の 4 要素

- ・ 避難所への応用:「いつ・どこで・何を・どのようにすれば・いつ終わるか」が視覚的に明示されることで、指示なしに自律的な行動が可能になる
- ・ 「助けてカード」の事例:言葉で伝えられない子どもが使うカードが、クラス全体のユニバーサルツールになった



災害時に「遊び」を保障する事の大切さ

災害時は子どもの遊びが奪われるのが大きな問題。5～10年後、不登校・レジリエンスの低下・自己肯定感の低下として現れることが研究で示されている。構造化を考えながら遊びのスペース、遊びの確保をしていかなければいけない。

活動発表③長野市緊急時における子ども支援ネットワークの役割

- ・ 今現在、長野市・長野市社協との協定を目指して調整中
- ・ にじいろキッズらいふ・稲荷山支援学校と協力して視覚的支援カード作成中

コーディネーター育成研修の展開

緊急時の子ども支援コーディネーター育成研修を今年度は以下で展開予定

県内：飯田市、上田市

県外：富山県南砺市、静岡県富士市



パネルディスカッション

進行／清泉大学大学院看護学研究科清泉大学助産学専攻科 小児看護学 教授 北村 千章 氏

子どもの居場所を作り子どもを受け入れる際に必要な配慮は

- 山崎氏 声を出せない・我慢してしまう子どもへの丁寧なニーズキャッチが最重要課題。福祉の専門職人材、日ごろから地域に根差して活動している方の力が必要。
- 丸山氏 みんなにとってわかりやすい、子どもが自分で動ける環境を整えれば、限られた人数でも支援を必要としている人に必要な支援を届けられる。したがって避難所の構造化が必要。
- 小笠原 安心安全で子どもが中心の居場所の提供。子どもの声を聞いて1日のスケジュールを決める。子どもたち自身が見通しを持てて安心感につながった。

会場からの意見① 茨城 NPO センターコモンズ 横田 能洋氏

さまざまな配慮が必要な、初めて会う子どもを受け入れる際のハードル、受け入れ体制の整え方、NPO の BCP や連携の未整備が課題。

- 小笠原 2019 年の災害時、行政はどこに子ども支援をお願いしたら良いかわからないという意見があった。子ども支援の窓口があれば連携しやすいということで、ネットワークの設立に至った。
- 山崎氏 能登半島地震の際、手帳を取得していない人たちが避難所になじめなく、車中泊しているケースが多かったと聞いている。
- 丸山氏 災害時、どこに逃げるのか、どう行動するか、家族で話し合っ決めてるようにと伝えている。長野市から「はぐくまファイル」を一人一人に交付している。薬、アレルギー、どんな子かなどの情報を入れておくファイルだが活用が進んでいない。もう少し親御さんに活用してほしい。
- 北村氏 2019年振り返ると、日頃地域で子どもを見ている場所が中心になるやり方一番いいと思う。全国に広がってほしい。こういう連携があったから医療的ケア児の指定福祉避難所、できたのがこどもの城が中心に動いたのがここまでネットワークが広がった

子どもたちが何を望んでいるか、子ども達とともに一緒に考えていく視点が必要。どんな居場所を求めているか

- 小笠原 子どもたちが後になってトラウマにならない環境を整える。点ではなく線で見、支援を継続する。そのためにガイドラインを作成した。
- 丸山氏 子どもは自分の気持ちを正確に言語化できないため、潜在的なニーズ・心の声を聞く専門性と意思形成支援が必要。子どもたちに役割を与え、簡単なことで良いから信じて任せて感謝する。子どもの自己肯定感を下げない。
- 山崎氏 日頃からどれだけつなぎ先を把握できるか、社協の力量にかかっている。皆さんには地元の社協とつながり、いざというときにつなぎ先としてお手伝いしてほしい。つなぎ先を知っているという情報も大事。情報を収集してつなぐ、日頃からの連携でそれが可能になる。

会場からの意見② 労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団 上田事業所 市川 一恵氏

児童クラブでの支援経験を踏まえ、視覚的支援の重要性和構造化の普遍的有効性を実感。上田市で何かあった場合、どこに連絡すべきかがわからない部分がある。自分の地域にこうしたネットワークがあると安心できると思う。